

な反応が観察され、その反応は腎摂取率に依存することを認識しておく必要がある。

18. ^{111}In 骨髓シンチグラフィにおける肺描出の検討 (第2報)

中駄 邦博 塚本江利子 永尾 一彦
鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 古館 正徒
(北大・核)
有本 卓郎 (同・放)
鈴木幸太郎 古屋 輝夫 (同・放部)

昨年度の臨床例での検討に続いて放射性肺臓炎の動物モデルを用いて $^{111}\text{InCl}$ の肺集積について検討した。右肺に 30 Gy 照射したラット (WKA, ♂, 8~12 週齢) に照射後 2 週目より最高 10 週目まで、経時的に $^{111}\text{InCl}$ シンチグラフィを行い、肺集積について評価するとともに ^{67}Ga シンチグラフィおよび肺 CT の結果と比較した。照射後 5~6 週目で $^{111}\text{InCl}$ の肺集積が観察されるようになり、時期的には ^{67}Ga および肺 CT 所見の陽性化とはほぼ同時期であった。病理組織学的変化との比較では、肺肺炎の明確になる時期に $^{111}\text{InCl}$ の肺集積が認められるようになり、線維化をきたすようになると $^{111}\text{InCl}$ の集積程度も強くなる傾向が認められた。

19. 門脈血流比と血清 7S コラーゲン値-RIA (その 1): 門脈血流比に関して

政井 章 星 宏治 木村 和衛
(福島医大・放)
藤田 悠治 宗像 志朗 荒井 治子
佐藤 善二 (太田西ノ内病院・放)
迎 慎二 (同・消化器)
加藤 和夫 鈴木 晃 (福島医大・核)

われわれは、以前より肝シンチ (Tc-99m-phytate) 施行時に dynamic study を併用し、平田ら*の方法に基づき門脈血流比を算出し、臨床診断に応用してきたが、今回、線維化程度を反映する指標として開発された血清 7S コラーゲン値-RIA (7S 値: 日本 DPC コーポレーション) を使用する機会を得た。そこで、肝疾患群をさらに細分化し、門脈血流比の有用性 (結果: その 2 に記載)、7S 値の有用性 (以下、その 2)、両者間、すなわち、門脈血流比と肝線維化程度との相関関係の有無につき検討を

行った。* 平田和文, 他: 肝臓, 26: 74-79, 1985

20. 門脈血流比と血清 7S コラーゲン値-RIA (その 2): 血清 7S コラーゲン値と両者の相関

星 宏治 政井 章 木村 和衛
(福島医大・放)
藤田 悠治 宗像 志朗 荒井 治子
佐藤 善二 (太田西ノ内病院・放)
迎 慎二 (同・消化器)
加藤 和夫 鈴木 晃 (福島医大・核)

各種肝疾患のうち、代表的な疾患での門脈血流比と 7S 値はおおの、肝硬変 (27 例) $47.3 \pm 11.4\%$, $9.6 \pm 3.2 \text{ ng/ml}$, 慢性非活動性肝炎 (21 例) $66.0 \pm 7.2\%$, $4.9 \pm 1.0 \text{ ng/ml}$, 慢性活動性肝炎 (18 例) $57.7 \pm 9.7\%$, $9.2 \pm 6.7 \text{ ng/ml}$ であり、それぞれ病勢に応じた数値を示した。門脈血流比と 7S 値の相関では、両者間に明らかな相関を認め、門脈血流比の低下した症例ほど 7S 値が高値を示すとの結論、すなわち、7S 値は、線維化程度に加えて、肝循環動態から見た肝予備能を反映する指標と成り得ることが示唆された。なお、検討は、肝癌、肝転移、肝外疾患症例等に関しても行った。

21. サージカル・ガンマプローブの試作とその物理的特性

駒谷 昭夫 安久津 徹 高橋 和栄
山口 昂一 (山形大・放)
山田 潔忠 (同・脳外)
川村 幸一 (アロカ)

テルル化カドミウムの小型半導体検出器を用い、あらかじめ投与した腫瘍親和性の放射性医薬品の γ 線を手がかりに、腫瘍の局在や残留腫瘍の有無を探るためのサージカル・ガンマプローブを試作した。コリメータは外径 9 mm, ホール長 7 mm, ホールの直径は 2 mm と 4 mm の 2 種類を作成し、それぞれの特性を調べた。Tl-201 線線源において、2 mm ϕ コリメータでは 1 mm 深の計数率 36 kcps, 計数率が半減する深さは 7 mm であった。4 mm ϕ コリメータでは、それぞれ 69 kcps, 7.5 mm であった。FWHM は 10 mm 深でそれぞれ、5 mm, 10 mm であった。感度と分解能は実用上適当と考えられたので、操作性と安全性の改良が今後の課題である。